

平成21年10月1日発行

沖縄県護国神社社報

うむい 十号



伊江島の城山から見た風景
くすくやま

天皇陛下御即位二十年奉祝記念号

奉祝 天皇陛下御即位二十年



目次

3	宮司挨拶
4	特集 沖縄にふりそそがれる大御心
8	両陛下の沖縄に寄せられる深い御心 座喜味和則
10	インタビュー①
12	皇室との関わり 嶺井政治
14	インタビュー②
16	皇居勤勞奉仕を通じて思う皇室 玉城正範
18	皇居勤勞奉仕に参加して 沖縄県護国神社職員
21	昭和天皇(皇太子時代) 沖縄県行啓秘話
21	漫画・益田健太郎
21	社務日誌
24	永代慰靈命日祭祀新規申込者・祭祀料奉納御芳名
	御創建七十五年記念事業 奉賛者御芳名
	玉串料・奉納物品・寄贈図書御芳名・編集後記

社報「うむい」について

沖縄の言葉で「思い、願望、考え、所存」のことを「ウムイ」といい、戦争で亡くなった人達の思い、そして残された遺族、戦友達の思いを次の世代へと継承すべくつけられた名前。
日清戦争以後、敢然と困難に立ち向かっていった先人たちの尊い精神が、この「うむい」を通して末代まで受け継がれ、真に戦争の無い平和な世の中になるようにとの願いが込められている。

宮司挨拶



御即位二〇年を奉祝し
沖縄県護国神社の展望をふまえて、
ご協力お願い申し上げます

沖縄県護国神社 宮司 伊藤陽夫

独楽の芯がぶれないように、宇宙太陽系の軸心もぶれることがない限り地球は安泰であります。そのように日本の国政も、軸心(皇室)がぶれないで尊厳を維持して下さっておればこそ国民は安泰でおれるのです。今回政権交代劇の激変の中で皇室(中心)のありがたさやかたじけなさを国民等しく感じることができたことでしょう。今上陛下は昨年御即位二〇年、今年には御即位二〇年を迎えられ、しかも四月十日には御成婚五十年の大婚式を祝われた目出度き年になりました。その御稜威(みいつ)を蒙(こうむ)りまして我が神社にも記念すべき吉事がもたらされました。

皇后陛下から御歌集『瀨音』を賜りて…

昭和四九年にお詠み下さって以来この歌の「護国神社」がどの県のも

のか、不明のままでありましたが、その時初めて闇明(たぬみ)になりました。御歌が載っている頁に付箋まで貼って、侍従職を通して御下賜(ごかみ)下さったお心くばりに、当神社役員以下畏み奉りて、去る六月の理事会においてその歌碑を、御即位二〇年奉祝事業として建てることになりました。場所に関して難航しました結果、来年竣工予定の新館社務所の玄関横植

え込みの一等地に建立することが決まりました。この際天皇陛下のお祝いなので御製の琉歌の歌碑も許可いただいで建てさせていただきましたことになりました。奉祝行事の環境ですから、二年越しの奉祝事業ということになりました。奉祝事業として、皇后陛下の御記念にお応えするべく愚生が上梓して天皇皇后両陛下に献上申し上げました小冊子『大御心と沖縄』を、神社買い取り分五〇〇冊を関係者に

『瀨音』を賜りて…

の間、床の間もあり、崇敬者控え室、歓談の間もござ

お配りさせていただきました。それが誘い水となり、この『うむい』特集号も企画されました。沖縄にそいで下さる大御心に対して礼び(いやり)奉る(感謝申し上げる)意をもって、奉祝の微意(こころ)を編集いたしました。お汲みいただければ幸甚に存じます。

さて目下当神社は、御創建七十五年記念事業として境内整備と新社務所の建設に向けて、皆様方へ奉納募金のご依頼をお願い申し上げます。古来、鎮守の森の神社の社会的役割として期待されている働きを、現代において、沖縄においてどれだけ花を咲かすことができるか。御祭神の御加護、崇敬者の奉賛御協力を祈念するばかりであります。

天皇陛下のお言葉

(全国植樹祭御臨席のため御即位後初めて御来県を控えて)
「初めて沖縄県を訪問した時、当時の知事から沖縄県では三人に一人、伊江島では二人に一人の人が、島民がなくなつたというのを聞いたことが忘れられません。肉親や身近な人々をなくした人々の悲しみを思う時本心に心が痛みます。訪問に当たってはそのことを念頭に置いて、訪問するつもりです。」

(御即位十年を迎えて)
「沖縄はその後米国の施政下にあり、二七年を経てようやく日本に返還されました。このような苦難の道を通り、日本への復帰を願った沖縄の歴史と文化に関心を寄せているのも、復帰に当って沖縄の歴史と文化を理解し、県民と共有することが県民を迎える私どもの務めだと思つたからです。」

特集 沖縄にそそがれる大御心

特集編集に当たって

大御心とは天皇陛下のお心で、常に「民安かれ国泰かれ」のお心のことです。その心の働きは「いつくしみ」であり、慈悲・慈愛の「慈しみ」にあたります。「おもいやり」「いたわり」の心のことです。その大御心が、かに沖縄にそそがれ続けているか、右のお言葉からも窺い知れると、ころです。戦後沖縄の事実場面を追って認識をあらため、その大御心の深さを思い知り、感謝の意をもって奉祝申し上げたく特集を組んでみました。

編集部

ひめゆりの塔事件

沖縄に戦後はじめて皇族が来られたのは昭和五十年、皇太子同妃両殿下おそろいでの御行啓でありました。沖縄国際海洋博覧会の開会式典にご臨席されるためでした。国民周知の通り、ひめゆりの塔では火炎瓶投擲事件がありました。県民歓迎

のうらに皇室に対する尋常ならざる怨念の炎が燃え続いていたのでしようか。
いまでは考えられないことですが、事件の数日前にあるうことか沖縄県警本部の記者クラブで、ヤマトから来た中核派の二名による記者会見が行なわれています。「皇太子訪

中止。爆砕」、天皇訪米阻止闘争と共に今年の闘争目標」という皇室闘争宣言をぶち上げました。県本部の広報課員はかれらを阻止するどころか、便宜をはかっていたということですから、当時の世情は推して知るべしです。「行啓警備を手伝うものは沖縄県人に非ず」との雰囲気にもまれてオドオドしている沖縄県機動隊も為す術もなく、那覇市内では二十五件の無届けの違法デモが荒れ狂っていたということです。
ですから、海洋博覧会の委員会からも宮内庁からも、皇太子殿下が密かに希望しておられた摩文仁ヶ丘をはじめ南部方面への行啓は大反対されてきました。何が起るか、警備上安全に確信が持てなかつたのでしよう。
「何があっても受けま」
ところがご出発直前、前夜です。召し出された外間守善氏(沖縄学研究所所長・当時法政大学教授)に、殿下は同意を求めたい風情で訊かれているのです。「戦没者鎮魂のため南部戦跡を訪ねたいのですが、外間さんはどう思いますか」と。騒然たる実情をご存じになつてからも側近

を寸分の変更もなく爽やかにおこなしになつたお姿は県民の心を打ちました。先の佐々淳行氏が、平たい言葉で次のように締めくくつています。いかにもと納得させられます。「こんな人柄のいい皇太子同妃両殿下に火炎瓶をぶつけるなんてひどい。それも沖縄人がやった。悪いことをした、・・・という贖罪意識が、まさに災いを転じて福となすの諺どおり、沖縄県民の皇室に対する親近感を、恩讐をこえて一挙にたかめた模様であつた。」



『菊の御紋章と火炎瓶』表紙から転載

に懸命に「国母・皇后」の代行をつとめ、人々に優しい態度で臨む美智子妃殿下への好感度とともに、人気は急上昇した。そして何よりも、皇太子殿下の御真情です。先記の外間氏が両殿下ご出発前夜に召し出されたのは、現地ですら「お言葉」に関するチェックのためでありましたが、その原稿通りのお言葉をお話しされ、繰り返して公表されています。

「私たちは沖縄の苦難の歴史を思い、沖縄戦における県民の傷跡を深く顧み、平和への願いを未来に繋ぎ、ともどもに力をあわせて努力していきたいと思ひます」と。さらに、

「払われた多くの犠牲は一時の行為や言葉によつてあがなえるものではなく、ひとびとが長い年月をかけて、これを記憶し、一人ひとり、深い内省の中にあつて、この地に心をよせ続けていくことをおいて考えら

れません。」と。
まさに深い内省の中からの強い雄叫びを発しておられるように思われます。事件当日最終日程になつてきた「くろしお会館」(沖縄県遺族連合会会館)でのご挨拶です。そのとき予定になかつた「ひめゆり同窓会」の人々をお招きになつて昼間の事件の辛労をいたわられました。幹部

代表者たちには一人ひとり丁寧に声をかけられ戦災事情を聞き取られていました。その模様は当時遺族会の役員であつた、現在沖縄県護国神社の会長である座喜味和則氏がその場に居た証し人でありますので、本誌でも関係記事を掲載しております。火炎瓶が投げられたとき妃殿下

がわが身をていして殿下を庇おうとなさつた美談も伝わっています。いや、ともかくにも両殿下の決然たる、そして平然たるお態度で全日程



遺族に声をかけられる両陛下

海洋博覧会は導火線

さて、その沖縄国際海洋博覧会に閉しても、殿下は同年暮れのお誕生日前日の記者会見において、次のようなお言葉を下さっています。

「・・・成功不成功は海洋博覧会を見た人の心の中にどうとどまるかが大事だと思ひます。復帰後間もない沖縄に初めて沢山の人が行き、沖縄の土を踏んだということに意味がある。復帰前に本土で育つた人は沖縄に対する認識が不足で、私などもそうでした。」と正直に言つておられます。そして

「沖縄への関心を持ったのは、毎夏訪れる『豆記者』の存在が大きかつた。」と述べられている、その豆記者との縁がのちのち殿下と沖縄とのつながりを強める契機になつていきます。

「奄美へ行ったときも沖縄の歴史や文化についていろいろと聞きました。一人一人と接触、人間の交流によつてお互いの理解を深めていくことが大事ではないだろうか。」と話され、

「沖縄には他の地域と違った歴史文化があるのに学校教育の中にはほとんどそれが入っていないことです。将来学校教育の中に入れるべきだと思ひます。」と配慮くださっています。そして「気になるのは、」と強調されて「沖縄の歴史は心の痛む歴史であり、日本人全体がそれを直視していくことが大事です。」と、語を次いで「避けてはいけません。」とまで仰つたのです。

「琉球処分」の時代から戦後の復帰まで私たちはあまり学んで来たとはいえない。海洋博覧会が沖縄を学ぶことの導火線になればと思ひます。これか

「昭和五〇年二月一六日 四二才のお誕生日を前に」

「これからは機会があれば何回も行きたい。」とのお気持ちがお氣持が実に行幸啓

愛楽園で「皇太子殿下萬歳」

愛楽園で「皇太子殿下萬歳」

第一回目は、今述べてきました沖縄国際海洋博覧会の開会式御臨席のため昭和五〇年（一九七五年）七月一七日から一九日まで。

事件のあと炎天下の南部戦跡を誠心誠意、汗もおふきにならず、一カ所も疎かになさらず、直立不動の姿勢で説明をお聞きになり、拝礼は

深々とお付きの誰よりも丁寧になさられました。

その日の午後四時に名護市の国立ハンセン病療養所「愛楽園」を訪問されています。予定の一時を四〇分もオーバーするほどに心を込めて見舞われたのです。

お帰りの時、療養者たちから、地元の出歌「だんじょかれよし」の合唱と手拍子でおくりだされています。その情景を琉歌にお詠みになつて翌年春、次の二首が愛楽園に届けられています。

だんじょかれよしの歌や湧上がったんじょ

見送る笑顔目にぞ残る

（げにこそ目出度い歌の歌声が響いて見送ってくれた笑顔が瞳に残つて忘れられない。）

よ。何でなのかわからないですが、このように述べを以前紹介しました。

約二千柱と兵士一五〇〇柱が祀られている慰霊塔です。この平野には東洋一とも目され



伊江島の芳魂の碑

た三本の滑走路をもつた重要軍事基地があったため、米軍の猛爆撃を受けております。塔頭としてそびえ立つ城山も姿が変わるほどでした。爆撃に逃げ惑って、家族が倒れ込むのを遠目に、一人逃げて生き残った当時一四才の大城和子さんのことは、本誌八号で詳しく紹介しましたので、手控えますが、戦争孤児で苦勞の人生のなか国家・皇室に憎しみをもち続けておりました。しかし、この「芳魂の碑」に参拝される皇太子同妃両殿下のお姿に接したとき、思わず皇后陛下に手をさしのべて握手をしてしまったのです。「なんとうつくしい！」という感動につきうごかされての行動でした。「もう美しさに涙がポロポロ出てきたんです

*九頁の囲み記事・「歌声の響き」誕生のお話し」参照。

琉歌に關しては改めてふれることにしますが、次の二首もこの日の事を詠われております。

ふさかいゆる木草 わぐる戦跡 くり返し返し 思ひかけて

花よおしやげゆん 人知らぬ魂 戦ないらぬせよ 肝に願て

（花を捧げます、人知れぬ御霊に。戦いのない世を心から願つて）

これらの二首は殿下が初めて琉歌をおつくりになつた記念すべきものです。帰京後すぐに外間守善氏に「琉歌になりますか」とお見せになりました。外間氏の指導のもと推敲もあつたのでしよう。これが侍従長を通じ当時の屋良知事に託され沖縄県遺族連合会の金城和信会長に届けられたのは、翌年一月、海洋博閉会式御臨席のため御来島の際でした。

遺族会の役員であつた座喜味和則氏は、その歌を賜つたとき「沖縄がはらつた多くの犠牲に対するお気持ちと、その犠牲のお陰で今日の日本国

えに広がっている畑は何事もなかつたように穏やかな風情で、そして私のうしろにそびえている城山も何事もなかつたかのようにそびえているけれども、この地にあんなひどい戦いがあつたかと思うと耐えられない思いでおります。という意味に解

積できます。」と。此の歌碑は、「皇太子殿下皇太子妃殿下御来村記念碑」と共にその展望台近くに有志の寄付で建立されている。村誌に「一孤島に両殿下お揃いでの御訪問は：全国でもない：村民こそつて歓迎申しあげた記念碑である。」とあります。

昭和天皇のお言葉

第三回目は昭和六二年（一九八七年）、沖縄海邦国体に御臨席。昭和天皇が御不例中のため、ご名代として御来島。一〇月二四日午後四時、国立沖縄戦没者墓苑を御拝礼。四時半、沖縄平和祈念堂を御観覧。県役員関係者に御会釈。この時昭和天皇からの懇ろなお言葉が、皇太子殿下によって読み上げられました。「さきの大戦で戦場となつた沖縄が、島々の姿をも変える甚大な被害を蒙り、一般住民を含む数多の尊い犠牲

の平和があるというお気持ちを非常に強くお持ちなのではないか」という感想をもらしています。

伊江島の椿事

第二回目は、海洋博の閉会式御臨席のため昭和五一年（一九七六年）一月七日から二日間。鹿児島空港からお召し機を乗り換えられて伊江島の臨時空港につかれたとき、タラップを降りられたあとの両殿下の行動が、目撃者の口から伝わり語り継がれています。お二人は滑走路に向かつて静かにお辞儀をされてしばらく動かれなかつたということ。滑走路に埋められて居るであろう遺骨の御霊をはじめ戦没者に対する敬虔な祈りでありました。



海から眺めた城山

魂の碑」です。あの激戦下人口の二分の一の

者を出したことに加え、戦後も長らく多大の苦勞を余儀なくされてきたことを思うとき、深い悲しみと痛みを覚えます。

ここに、改めて、戦陣に散り、戦禍にたおれた数多くの人々やその遺族に対し、哀悼の意を表すると共に、戦後の復興に尽力した人々の苦勞を心からねぎらいたいと思います。終戦以来すでに四十二年の歳月を数え、今日この地で親しく沖縄の現状と県民の姿に接することを念願していました。思わぬ病のため今回沖縄訪問を断念しなければならなくなつたことは、誠に残念でなりません。健康が回復したら、できるだけ早い機会に訪問したいと思ひます。

皆には、どうか今後とも相協力して、平和で幸せな社会をつくり上げるため、更に努力していただけることを切に希望します。」

この大御心をいただいています。これを聞いて西銘順治県知事は、「お言葉に接し、感動胸にせまるものがあります。これで、ようやく沖縄の戦後は終わりを告げたと思う。」と談話を発表しています。

（以下次号）



伊江島城山中腹にある皇太子殿下時代の琉歌碑

ある日のテレビ番組（春の皇室スペシャル）でこの歌に關して外間守善氏は、

ま目のま



『天皇論』(小林よしのり著) 136 頁より転載

当神社座喜味和則会長が昨年十二月に東京で行われた天皇陛下御即位二十年奉祝中央式典において沖縄県遺族連合会の名誉会長として祝辞を述べました。この内容は「うむい小」二号でも触れましたが本号にて全文を掲載致します。また挿入した漫画は、小林よしのり氏が式典に参列し、座喜味会長の祝辞に心を動かされ、著書『天皇論』にて紹介されたものです。本誌転載を申し出たところ快く許可下さいました。

両陛下への沖縄に寄せられる深い御心

座喜味 和則

沖縄に対し、並々ならぬお気持ちをお寄せ戴いている天皇陛下、皇后陛下に心からの感謝を申し上げたく、この度、沖縄県より参りました座喜味でございます。

私はこれまで五回、両陛下のご接見の機会を戴いておりますが、最も印象深く残っておりますのは、平成五年、天皇陛下が御即位後初めて沖縄に行幸なされた時です。

沖縄県で行われた全国植樹祭にご臨席のためでした。

両陛下は四月二十三日、那覇空港にご到着されると先ず最初に沖縄戦の激戦地・南部戦跡に向われ、天皇陛下として初めて国立沖縄戦没者墓苑に献花、ご参拝になりました。

次に、沖縄平和祈念堂で県内各市町村遺族の代表百五十名に対し約五分間、お言葉を述べられました。「即位後、早い機会に沖縄県を訪れたいという願いがかない・・・」と、ご

自分のお気持ちを込められたお言葉を拝聴し、沖縄の犠牲に対して心から慰めなければいけないという陛下のお気持ちを強く感じました。国の安泰を守るために犠牲になった方々へのお言葉は、御霊の供養になったものと思います。

次に両陛下は前列に並ぶ遺族代表十名の前にお立ちになり、遺族一人ひとりに優しく声を掛けていただきました。

「どなたが亡くなられたのですか、大変ご苦労されたのですね」とのお言葉をいただき、戦没者の妻は感激の余り返事につまり、顔をあげることもできませんでした。戦没者の遺児は、苦勞の末亡くなった母へのお言葉として受けとめ、「親子の苦勞が一遍に報われました。早速亡き父母の霊前に報告します」と涙していました。

最後に沖縄県遺族連合会会長で

あつた私が代表して、「陛下のお気持ちには、ここに来られなかつた多くの人に必ず伝えます」と、お礼の言葉を申し上げました。天皇陛下から直接お言葉を賜ったあの日の感激は、いまなお私ども遺族の心の支えとなっております。

次にぜひご紹介申し上げたいことは、陛下から賜った琉歌のことです。琉歌とは八・八・八・六音を基調とした沖縄独特の短歌ですが、陛下は、皇太子殿下として沖縄に来られた昭和五十年、南部戦跡を初めて巡拝されたお気持ちを、次のようにお詠みになりました。

ふさかいゆる木草 めぐる戦跡
くり返し返し 思ひかけて

「生い茂っている木草の間を巡ったことよ、戦いの跡にくり返し思いを馳せながら」という意味です。

「摩文仁」と題されたこの琉歌を、沖縄では毎年、戦没者追悼行事の中



『天皇論』(小林よしのり著) 135 頁より転載

作詞・天皇陛下 作曲・皇后陛下 「歌声の響き」誕生のお話

昭和五十年、両陛下（皇太子時代）は初めて沖縄行啓を果たされました。この時、両陛下たつてのご希望で、当初の予定にはなかつた『国立療養所愛楽園』への訪問が実現しました。ここでは両陛下は一人ずつ入所者の手を取り励ましや、いたわりの言葉をおかけになり、予定時間をオーバーするほどでした。入所者はそのやさしいお言葉に、こんな有難いことはないと感じ、両陛下がお帰りの時に手拍子をまじえ、沖縄民謡の『だんじゅかりゆし』を合唱してお見送りしました。陛下は感動され、その時のことを琉歌でお詠みになり、入所者たちがご訪問の時のことを詠んだ作品集をお返しとして、その琉歌を愛楽園に贈られたのです。それからこの琉歌を愛楽園の皆さんが沖縄民謡に合わせて歌っていました。その歌声の録音テープが陛下のお耳に触れることになり、かねがね皇后陛下の作曲をお好み陛下はオリジナルの曲を作りたいと思っていました。その歌の録音をお考えになりました。こうして、作詞・天皇陛下 作曲・皇后陛下の「歌声の響き」が誕生しました。また、陛下は二番の歌詞（琉歌）もお詠みになりました。二番は皇后陛下が愛楽園の納骨堂脇に咲いていたゆうなのご印象を、歌会始にご詠進になられた御歌「いたみつつなほ優しくも人ら住むゆうな咲く島坂のぼりゆく」を思い浮かべてお作りになりました。

だんじよかれよしの 歌声の響き

見送る笑顔目にど残る

だんじよかれよしの 歌や湧上がたん

ゆうな咲きゆる島 肝に残て



インタビュー①

元 沖繩県副知事
現 沖繩県護国神社理事

嶺井政治さんに聞く
皇室との関わり

— 早速ですが、今上陛下に何度もご拝謁されているそうですが、思い出をお聞かせ下さい。

嶺井 私が平成十年に叙勲（勲三等旭日中授章）を受章したときに皇居「春秋の間」でお会いしました。全国の叙勲者を代表して、天皇陛下にお礼を言上する役目を仰せつかったんですよ。「この度は勲章を授与せられまして、私どもの榮譽これに優るものはありません。私どもはその榮譽に対し、それぞれの分野にお

いて一層精進に励む決意でございます。ここに一同を代表いたしまして、謹んで御礼申し上げます」と申し上げ、陛下は「皆さん、長い間、それぞれの分野でご苦労なさって国のために、これからも健康で頑張ってください」とおっしゃられました。

三百人の代表で叙勲の御会釈

— 御代表ということですが、何名いらつしやりましたか？

嶺井 三百人いましたよ。御立ち



台とかも一切ないんですよ。陛下がすぐ目の前に立っておられるから、大きな声を出すわけにはいかない。後ろから「声が小さい。」と言われてましたが、すぐ前に立っておられるので、大きな声を出すわけにはいきませんでした。

— 御礼の言葉は決められているのですか？

と、「陛下から編曲して差し上げなさいと仰せにされましたので、私がさせて頂きました。」とおっしゃられたのです。（※ここでいう「だんじゅかりゆし」は皇后陛下が沖繩の曲調を活かしてお作りになられた「歌声の響き」という曲のことです。）

御即位十年式典で「歌声の響き」

— 他に今上陛下とのエピソードはありますか？

嶺井 平成十一年に御在位十年の茶会に招待されました。その時は席が陛下のすぐ横のほうでした。この茶

— 両陛下の沖繩への思いが伝わりますね。他に今上陛下にお目に掛っておられますか？

嶺井 皇太子のときは何度もお目に掛っています。国体の夏の大会には皇太子殿下がお出ましになられるのですが、副知事時代に国体で三、四度お会いしています。山梨大会のとき（昭和六十一年）かいじ国体、昭和六十二年の沖繩海邦国体の前年）には、西銘知事が知事選挙だったので、僕が代りに山梨県知事から国体旗を引き継ぎました。

— 翌年が沖繩ということが分かっていますから「お待ちしておりませう」ということで殿下にお会いになられているわけですね。

— 陛下がすぐ目の前に立っておられるから、大きな声を出すわけにはいかない。後ろから「声が小さい。」と言われてましたが、すぐ前に立っておられるので、大きな声を出すわけにはいきませんでした。

— 殿下が沖繩ということが分かっていますから「お待ちしておりませう」ということで殿下にお会いになられているわけですね。

みねい せいじ 大正11年生まれ
沖繩県護国神社責任役員、沖繩特定免税店(株)代表取締役社長、日本トランスオーシャン航空(株)取締役会長、沖繩ビル・メンテナンス(株)取締役会長・那覇空港ビルディング(株)取締役相談役、日本AC公共広告機構名誉顧問。また県内各種団体の会長など数多く務められている。また元副知事として県行政に携われ、その後沖繩電力社長、会長を務められ沖繩の経済界の第一線で活躍。

嶺井 知事の代わりですが。

— 他にも会われていますか？

嶺井 沖繩電力社長時代に、観桜会に二回お招き頂きました。

— 沖繩でこれほど陛下に公式に会われている人はいないですね（感動）。

昭和天皇にも御拝謁

— 昭和天皇にも御拝謁なさっていますか？

嶺井 副知事時代に園遊会にお招き頂き（昭和六十一年、沖繩海邦

国体の前年）、通常、陛下は御立ち台に立っている人のみに声をかけられますが、その時は御立ち台ではない指示された場所に夫婦で立っていましたら、沖繩県副知事というネームプレートが見えたのでしよう。侍従長が「陛下、沖繩からみえてます。」と言われました。すると、陛下が「沖繩はこの頃どうですか？」とおっしゃったので、とっさに「国体には陛下のお越しをお待ちしております。」と申し上げると、陛下は「事情がゆるせば行きたいと思えます。」とおっしゃられたのです。しかし国体には必ず陛下がお出ましになるので事情がゆるせばとはどういう事なのかと思っていました。翌月から入院されたのです。私は国体の行幸啓本部長だったので、何度も宮中へ行って徳川侍従長と打ち合わせをしていました。陛下はその後手術をされました。国体の時までには良くなりましたが残念でした。

海邦国体では縁の下の...

— 実際、海邦国体には皇太子殿下のみお出ましでしたが、その時嶺井

さんは沖繩電力に異動されていますね。

嶺井 僕は国体の実行委員長、競技力対策向上委員長、行幸啓本部長の三つをしていました。ある日、西銘知事に呼ばれて、「国体はどうなっているか？」と聞かれたので、「全部施設を整えて、後は開催するだけです。リハーサルも全部終わりました。」と言うと、「じゃあ、電力へ行きなさい。あなたが行かないと天

— 殿下の御染筆ですか！（絶句）どのような関係でいらつしやいますか？

嶺井 トルコに研究所（三笠宮崇仁親王殿下のご発意による勅中近東文化センターの付属機関、アナトリア考古学研究所）をつくる資金を造成するゴルフで一緒にさせて頂きました。沖繩には四、五日お見えになりました。殿下はゴルフの腕前はシンドルですよ。朝から晩まで一緒に遊んでいただき、それから何度かお目に掛っています。

— それでは海邦国体の際には皇太子殿下に会われていないのですか？

嶺井 そうですね。寛仁親王殿下と親しくさせて頂いています。先日『皇族の「公（おおやけ）」と「私（わ

— 本当に多方面から御皇室に関わっておられるんですね。嶺井さんのすてきな人柄が？

個人的なつながりや、県内で活躍されている理由ですね。本日は忙しいところ誠にありがとうございました。

インタビュー②

沖縄県皇居勤労奉仕会 第二代会長
沖繩玉岳風会会長

玉城正範さんに聞く
皇居勤労奉仕を通じて思う皇室



たまき まさのり 昭和18年生まれ
沖縄県皇居勤労奉仕会会長
(株)大八産業代表取締役
浦添市文化協会詩吟部会長
沖縄県詩吟舞連盟理事長
沖縄玉岳風会会長玉城岳曹として詩吟の指導をされ活躍中

大婚式祝いに「芭蕉布」が

「本年は天皇陛下御即位二十年、さらに両陛下金婚式をお迎えになつた慶賀の年に当たり四月十日の御成婚記念日を含む日程にて奉仕されたそうですが、いかがでしたか？」

玉城 凶らずも御成婚の記念日に奉仕活動ができました。この日は

皇居内では記帳所が設けられ朝から大勢の人が足を運んでいました。私たちは清掃奉仕で行っていました。もちろん奉仕の日でしたが、折角ここまで来たので記帳をさせてい頂きたく係官の方にお願いをしていました。許可して下さいました。記帳を済ませると記帳所の横で皇宮警察音楽隊による演奏が始まりました。二、三曲演奏後に両陛下がお出ましになりお座りになられて演奏をお聞

ジツチャクもご存じ

「奉仕中、両陛下の御会釈でのエピソードをお聞かせ下さい」

玉城 御会釈頂くとき私は、参加者の皆さんを紹介したいので、前列にいらっしゃる方には十何回連続で参加しています。この方は神社の巫女さんです。など申し上げています。この時は「この方は浦添から参加しています」と申し上げたところ皇后陛下は「浦添獅子の踊りをみたのは浦添でしたね」と申され、陛下が「あそこはジツチャク」というところで、確か字は『勢理客』と書くのでしたね」と申されたのです。私は「そうでございます」と申し上げました。沖縄でも難しい地名の字までちゃんと覚えて下さっているのです。

カンヒサクラをご説明下さる

「作業中のエピソードはございますか？」

玉城 賢所の裏門前の通りを清掃中の時のことですが、突然係官が「これより天皇陛下がお出ましになります四列にお並びください。」と言いました。この道は陛下が御所からお出ましになり賢所に参入する通り道だったので。両側には桜の木が植え

られ、二十メートルほどの桜並木でした。御会釈以外で接見があることは大変珍しいことですので、私は参加者に「一列に並んでください」と言いました。みんな前に立たせ少しでもお近くにといい気持ちでした。陛下はそのまま通りすぎるだけの筈だったのですが私たちの前に立ち止まり「この桜は沖縄のカンヒサクラで今帰仁から頂いたものですよ」と教えて下さいました。みんな驚きました。「挿木からでございますか？苗からでございますか？」と尋ねるとなんと「種を蒔きました」と、仰せになられたのです。陛下自らお手植えされたカンヒサクラだったので。奉仕は四月でしたので花は咲いていませんでしたが季節にはちゃんと咲くということでした。またある年は、その桜の下の除草作業中に陛下がお通りになられ、そこに咲いているすみれは琉球すみれだということも教えて下さり、係官も驚かれるような場面もございました。

「御所から賢所までのこの桜並木は沖縄の道」と言ってもいいくらいですね。

「いちばん印象深い出来事はございますか？」
玉城 平成十二年に参上した時のエピソードで御会釈の時参加者で歌を歌うというハプニングがございました。直後の奉仕でございました。奉仕中、テレビで拝見した奉祝祭の話で盛り上がり終始感動していると、御会釈の時ついに抑えきれず一人が「だんじゅかりゆし」を歌い始めたのです。この御会釈の場は歌を歌うのは禁止されているにもかかわらず歌い始めてしまったのです。同じ参加者の一人が「やめなさい」と一喝したら歌声は止み静かになりました。ところが、そこへ陛下が「ダンジュカリユシでしょう。どうぞ続けて下さい」と仰せになられたのです。躊躇していると、さらに今度は皇后陛下が前に進まれて、私たちに手を差し伸べられ「どうぞお歌い下さい」と仰せになりました。なんと両陛下よりお許しを頂いたのです。参加者一同みな涙々で途切れ途切れになりながら、歯を食いしばりながら最後

まで歌いました。歌い終わると「ありがとう」のお言葉が賜りました。あの時の感動は忘れられません。こうした両陛下の想いを沖縄県民はまぎず知らなくてはならないと思えます。
犠牲者と遺族への強い思い
「皇居勤労奉仕を通じて両陛下への想いや今感じられていることは何ですか？」
玉城 両陛下の沖縄に対するお気持ちは並々ならぬものがございます。まして、第一に沖縄で犠牲になつた方々への痛恨のおもいがあるということですね、そしてさらにその遺族の方々に對する思いが深いということだと思います。これは他府県にはない思いが御会釈のとき何団体もある中で必ず真ん中の良く拝顔できる位置に並ばせて頂きます。また、両陛下は一人一人の名札をご覧になられ近くお話を頂きます。



上下白の作業着で揃えて奉仕（平成21年4月）

嘱託職員 島 仲 彌

天皇、皇后両陛下とのご拝謁は勤勞奉仕の最後の日である四日目に実現しました。午前中皇居内見学の後、皇居蓮池前参集所にて天皇皇后両陛下のご台臨を仰ぎました。両陛下は、紀宮殿下とご一緒に出御遊ばされ、各県からの団体に労いの言葉をお掛

(平成十二年四月二日から四日間)

榊 渡 辺 尚 武

天皇・皇后両陛下より皇居で、御言葉をお賜った。私個人が賜ったというよりは、私が沖縄県民であるが故に賜った御言葉なので、地元沖縄の新聞『琉球新報』の「声」の欄に次の記事を投稿した。

《今日一日から五日までの間、私は職員研修の一環として皇居清掃奉仕に参加しましたが、この時の天皇・皇后両陛下の清掃奉仕員への「御会釈」会場でのことでした。

《今日一日から五日までの間、私は職員研修の一環として皇居清掃奉仕に参加しましたが、この時の天皇・皇后両陛下の清掃奉仕員への「御会釈」会場でのことでした。》

私「ハイ！私です。沖縄県護国神社から参りました」 天皇陛下「沖縄では多くの方が亡くなられて……」 私「十七万八千六百五十一柱のご英霊をおまつり致しております」と

すると、横におられた皇后陛下が「みたまのお鎮めをお願いいたします」とおっしゃって深々と頭を下げられた。そして最後に天皇陛下が「こ

に参加して

【沖縄県護国神社職員感動】

事務局長 宮里 洋子

両親と一緒に四日間の皇居勤勞奉仕に参加することが出来、生涯の思い出となりました。実際に皇居、赤坂御所に足を踏み入れると、そこは別世界の様で、荘厳な佇まい、樹齢数百年の老木、手入れの行き届いた草木、庭園は実に素晴らしく、桜の咲き誇る好季に奉仕させて頂き、貴重な体験となりました。

(平成十六年四月六日から四日間)

二度目の皇居勤勞奉仕は妹一人姪を誘って参加させて頂きました。神社に奉職させて頂いているお蔭でこの様な機会に恵まれたことに感謝しております。

(平成十九年四月八日から四日間)

れからも遺族の支えとなって務められるよう祈っております」と結ばれた。

後程、案内係の方が私に「団長以外の方に陛下が直接言葉を掛けられることは極めて珍しいことです。沖縄への思いは昭和天皇の遺志を継がれているものと思います」と言われていた。

そしてこの記事は無事二月二十二日付の新聞に掲載された。

二月一日から五日までの間おこなわれた、第十五回全国護国神社會青壮年神職研修会の第二回皇居勤勞奉仕に参加した時の出来事である。

私は皇居勤勞奉仕への参加は初めてで、しかも副団長という大任を担ってゐた。さらに運悪く沖縄を立

つ直前風邪をひき、喉の痛みを抱えての東京入りだったので、寒さのためさらに風邪が悪化しないだろうか、重労働に体力はもつのだろうか、副団長としての責任は果たせるのだろうか等々、不安がいっぱいのスタートだった。

ところが日程二日目、すなわち皇居勤勞奉仕初日早々、陛下から御言葉を賜り、風邪も不安もどこかに吹っ飛んでしまった。そして残り三日間小雪がばらつく寒い日が続いた中、靖國神社・皇居の間片道四十分近くかかる道程を毎日往復徒歩で通い、或いは枝や幹に刺のあるタラの木を根から掘り起こす重労働があったにも拘わらず、全く疲れることなく気分爽快で、アツと言う間に研

皇居勤勞奉仕

れも達成されさらなる満足感に充たされた。

折にふれ心尽くされる陛下

座喜味和則様からは、次の文をいただいた。

榊 彌 宜 加 治 順 人

勤勞奉仕最終日、天皇皇后両陛下の御会釈を賜わることので、蓮池参集所に集い整列をしてお待ち申し上げている間、不思議と静寂な気持ちになりました。時間近くなり、宮内庁職員から「御所を出発なさいました」との言葉で、緊張が一気に高まりました。時間が止まったように感じられました。天皇皇后両陛下が御着き

修の五日間が過ぎてしまった。

沖縄から参加したのは私一人のみであり、それだけに天皇・皇后陛下の御言葉を、沖縄県民に知らせなければという使命感にかられ、帰沖後新聞に投稿し、こ

《このたび渡辺神職が、有難い陛下のお声掛けをいただき、沖縄県護国神社に神鎮まるご祭神は、さぞかしお喜びになられた事と存じます。有難く大御心を拝するものであります。

両陛下の沖縄への思いやりについてご紹介しますと、平成五年四月二十三日に第四十四回全国植樹祭にご来県の際、那覇空港ご到着と同時に先ず最初に南部戦跡に直行され「国立沖縄戦没者墓苑」をご参拝・慰霊され、続いて県内遺族代表百五十名と接見、有難い御言葉をいただきました。その後、宿舎にお着きになられたのであります。

また終戦五十周年の平成七年八月二十日にも、日帰りの強行日程で「国

になられ、我々青年神職に対し、御遺族の方の支えになるように、とお言葉を賜わり、言葉では表現できない感動と身の引き締まる思いで、拝聴賜りました。

四日間、畏くも天皇皇后両陛下並びに皇太子殿下のお近くで御奉仕させていただきました事は、これから神職として御英霊に奉仕するものとして、一生の糧となりました。

(平成十八年一月二十一日から四日間)

立沖縄戦没者墓苑」をご参拝、そして遺族代表百名と接見激励賜って、帰途につかれました。

この様に天皇・皇后両陛下は、常に戦没者と其の遺族に、深い思いやりの心を尽くされて居られることに、恐懼感激しているところであります。

両陛下様の益々のご健勝と、皇室の益々の彌栄をご祈念申し上げます。

遺族会長から、感想文までいただいたなんて、益々幸福な気分だ。とはいへ、大東亜戦争の沖縄戦で亡くなられた遺族の方々のことを思うと、浮かれてばかりもゐられない。沖縄戦の特筆すべき点は、日本国内で唯一地上戦がおこなわれたこと

編集部注

この文章は平成十一年四月十九日刊の『神社新報』に掲載されたものです。

榊 彌 宜 秋 永 万 岐

天皇陛下御即位二十年と御成婚五十年の慶賀の年に参加させて頂いたこと感謝致しました。奉仕期間中には四月十日の御成婚当日を皇居内にてお迎えでき、ご記憶もさせて頂いたことは大変感激致しました。いつも沖縄を気にかけてお

られる両陛下の御心は清掃奉仕中もいたる所から感じる事ができ、この度ヤマトンチュの私が沖縄から参加できましたことは感慨深いものとなりました。これからもご英霊をお護りしご遺族の心の支えとなるようご奉仕に務めていきたいと思っております。

(平成二十一年四月八日から四日間)

昭和天皇(皇太子時代) 沖縄県行啓秘話

思はざる病となりぬ沖縄を
たづねて果たさむつとめありしを

これは戦後、昭和天皇が沖縄巡幸を
果たせなかつた無念を詠った有名な御製である
だが、昭和天皇が皇太子殿下のころ
沖縄を訪問されているのを知る人は少ない



昭和天皇(皇太子時代)

漢那憲和艦長

予備役編入後は政治家となって
沖縄の発展と海外に移住した
沖縄移民のために尽くした
ハワイへ移民した一世たちは
「漢那提督は沖縄が生んだ最大の
偉人だ」とよく語っていたという

▲昭和6年 ハワイ・リピー耕地にて沖縄移民とともに

漢那提督は明治十年
那覇区西村(現・那覇市西で
誕生する

幼いころは腕白で
ケンカも那覇では
一番強かった

だが、六歳から漢学塾に通い
学校では皆が居眠りするなか
眠気とりに唐辛子をなめて勉強した
成績も常にトップだった

明治二十八年、日清戦争で勝利した
日本海軍の軍艦が沖縄に寄港する

当時、純白の制服の海軍士官に
多くの沖縄少年があこがれた

漢那少年もそのひとりだった

漢那少年は、海軍兵学校に四位の
成績で合格する。(卒業時は三位)

明治三十五年、沖縄に帰省した
漢那少尉は教育会総会で講演した
(以下その一部)

多くの県民は海に冷淡だが
この狭い地に安逸を求めず
無限の海洋に眼を向けよ!

漁業なり、海軍軍人なり
船員たる気概を鍛え
海事思想を養成せよ!

明治四十三年には沖縄の最後の王
尚泰侯爵の五女尚政子と結婚する

貧乏下級士族の青年が立身出世し
王女を娶ったのは史上初のことであり
この知らせに沖縄県民は快哉を叫んだ

その後大正七年には
四十一歳で大佐に昇進し
海軍軍令部の参謀となる

出世街道を邁進していた

そして、大正十年
当時皇太子であられた
昭和天皇の欧州外遊が
正式に決定する

海軍一の操艦術を誇る
漢那大佐は皇太子殿下が
乗船する御召艦「香取」の
艦長を命じられた

当初、沖縄への寄港は
予定になかったが

漢那は「この機会を逃すと
殿下の沖縄訪問を願える
日はないだろう」と沖縄への
寄港を強く懇請することになる

その結果、貞明皇后と
御皇族の支持を得る

東伏見宮殿下は
沖縄訪問がないとお聞きに
なる「漢那困るだろう」と
お言葉を賜られた

だが、沖縄寄港が
正式に決定しないまま
大正十年、三月三日
香取は横浜港から出港する

焦燥した漢那艦長は
その日の夕食時、供奉長の
珍田伯爵に沖縄寄港を訴えた

漢那艦長の熱意にうたれた
珍田伯爵は供奉員会議で
沖縄寄港を決定し
閑院宮殿下に言上する

▲前ページと同じサイトから引用

ここに沖縄訪問が正式決定し
同日夜九時、沖縄県知事に
電報で殿下のご上陸が伝えられた

三月六日、中城湾の与那原に
御召艦の艦隊が投錨した

県民が二日間て必死に作った
棧橋は紅白で飾られていた

なお、県道三十九号線は香取が接岸した地と
国道をつなぐ道路であるため約三百メートル
しかないが白黄がかった現在廃止

駅からは人力車で県庁に向かう

沿道には数万人の県民が奉迎した

その後、首里城で上覧になった
空手演舞に大変興味をもたれ
ご自身でカメラ撮影されている

翌年、殿下はこの空手演舞の
指揮をとった富名越義珍を
宮中に招き天覧演舞を催された

その結果、各大学に
空手研究会が発足し
空手は全国に広まってゆく

沖縄上陸前、殿下は漢那艦長に
「沖縄には永良部ウナギと
いうものがあるそうだが、
ぜひ食べてみたい」といわれた

沖縄出港後、漢那艦長がこの件を
尋ねると「大変おもしろいこと
お答えになった。漢那艦長はすくさま
」と沖縄知事に電報を発した

沖縄を出港した翌朝
三尾の飛魚が「香取」の
甲板に飛び乗ってきた

漢那艦長はこれを
さっそく殿下にお見せした

▲現在はイラブー汁として調理するのが一般的である

わが船にとびあがりこし
飛魚をさきはひとしき海を航きつ

昭和四十三年、歌会始の昭和天皇の
御製である。このときの光景をこ回想
された昭和天皇は漢那提督と沖縄県民
の赤誠を懐かしまれたことだろう

その後漢那提督は少将まで
昇進するが大正十四年に
予備役に編入される

これは人事として異常であり
殿下も「なぜ漢那がそんなに
早く予備役か」と嘆息された

※当時、沖縄では「漢那少将は薩摩に
やられた」と噂した。漢那は誘われても
薩摩の県人会に属さなかったのである。

最後に漢那提督が甲辰小学校で
生徒に行った講話を紹介する
(以下要約)

かつて我らの祖先は小舟を操り
太平洋、インド洋を航海して
交易し琉球王国を富ました

どうか諸君、我らの祖先に
誇りをもって、祖先に負けない
進取の気合いをもって郷土沖縄の
ためにがんばってもらいたい

この漫画は、恵隆之介著『天皇の艦長 沖縄出身提督漢那憲和の生涯』産経新聞出版を参照して描きました。漢那提督の詳細は同書をご覧ください。
漫画: 益田健太郎

▲香取 <http://blog.livedoor.jp/irootoko.jp/archives/859998.html> より引用

皆既日食 in 沖縄県護国神社

七月二十二日、四十六年ぶりと
なる皆既日食が観察されましたが皆さ
んの地域ではどのようにご覧になり
ましたでしょうか？ここの那覇市は天
気に恵まれて雲もなく約九十%まで
月が入り込む深い部分日食が観測で



いかにも沖縄の神社？！ ヤシの木と鳥居

きました。写真に収めるには大変困
難でしたが、とにかくシャッターを
切っていましたら、面白い写真が撮
れましたので掲載致します。境内か
ら空を撮影したものです。それにし
ても、とても神秘的でしたねえ。



社殿の屋根にレンズに反射した日食が…お御霊？！

御奉納いただきました

玉串料御奉納者名 (社務日誌掲載以外)

- ・富山県南砺市 野原 鐵太郎 様
- ・京都府船井郡 堀 武士 様
- ・青森県西津軽郡 七戸 ヒサ 様
- ・千葉県野田市 杉崎 弥重郎 様
- ・北海道三笠市 柿崎 賢道 様
- ・北海道三笠市 柿崎 瑞光 様
- ・北海道中川郡 小谷 秀雄 様

- ・北海道余市郡 笠場 ヨミ 様
- ・北海道中川郡 栗野 喜代子 様
- ・北海道富良野市 笹岡 暢夫 様
- ・岐阜県 岩田 まさを 様
- ・埼玉県さいたま市 埼玉 吉治 様
- ・京都府福知山市 武田 一子 様
- ・兵庫県宝塚市 多田 容幸 様
- ・京都府福知山市 前田 一子 様
- ・神奈川県高座郡 吉田 博國 様

- ・北海道札幌市 島瀬 展成 様
- ・千葉県印西市 平山 是昭 様
- ・沖縄県那覇市 又吉 眞興 様
- ・日本会議大阪 廣中 房男 様
- ・広島経済大学教授 岡本 眞雄 様
- ・岡山県総社市 中村 和永 様
- ・東京都葛飾区 清水 しげ子 様
- ・東京都世田谷区 岩井 富子 様
- ・千葉県八街市 黒木 好仁 様
- ・那覇市与儀 大嶺 太郎 様
- ・奈良県香芝市 城間 成信 様
- ・京都府向日市 齊田 真 様
- ・横浜市横須賀市 実祖 社 様
- ・神社本庁 小間澤 肇 様
- ・沖縄県浦添市 仲吉 和美 様
- ・東京都渋谷区 江馬潤一郎 様
- ・東京都府中市 小境新太郎 様
- ・東京都足立区 屋良友の会 様
- ・東京都多摩区 諸星千代子 様
- ・東京都葛飾区 二葉 節子 様
- ・沖縄県浦添市 高橋 繁 様
- ・「恩愛をいただいて21世紀に贈る不朽の書第二部編」 著者より
- ・「明治神宮 戦後復興の軌跡」 明治神宮様
- ・「オリオンビル50年のあゆみ」 オリオンビル(株)様
- ・「いのち燃ゆ乃木大将の生涯」 近代出版社青柳英介様
- ・「親子で学ぶ偉人伝」第一巻〜第四巻 沖縄県沖繩市 志賀昭正・良子様
- ・「愛知県下英霊社忠魂碑等調査報告書第五輯」 愛知縣護国神社様
- ・「靖國神社遊就館圖録・英語版」 近代出版社青柳英介様

物品奉納者

- ・正面幕 (株)ジーマ、ジーマックス 様
- ・正月参拝者用御神酒 二樽 (株)ジーマ、ジーマックス 様
- ・清酒 龍華会 様
- ・泡盛 (株)久米島の久米仙 様
- ・鶏卵 沖縄鶏卵販売株式会社 様
- ・国旗 たけや旗染店 様
- ・鮮魚 居酒屋「翔」 様

ありがとうございました

編集後記

沖縄県護国神社の社報「うむい」も10号を迎えることが出来ました。今年は今上陛下御即位二十年という慶賀の年を迎えましたので、「天皇陛下御即位二十年奉祝記念号」として24ページカラー版の誌面を組みました。また、来年は当神社御創建75年となり、その記念事業として、現在新社務所の造営に取りかかっております。

慶事続きの中、さらなる御皇室の彌栄と国の安寧とを祈念し、また今後の斯界の隆昌を願い本号をお届けいたします。これからも皆様方の協力を切にお願い申し上げます。

発行 平成二十一年十月一日
発行所 沖縄県護国神社
〒900-0106

沖縄県那覇市奥武山町四四番地
TEL 098-818-5717・2798
FAX 098-818-5717・7917

編集担当 秋永 万岐
印刷所 (株)うるま印刷